

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 作文の部 最優秀賞

「大雨から学んだこと」

鳥越中学校三年 藤本 康太郎

二〇二二年八月四日。石川県は未明から記録的な大雨に見舞われ、小松市では梯川が氾濫し市街地が冠水したり、白山市でも同様に手取川が氾濫危険水位に達したりするなど、主に小松市や白山市を中心に甚大な被害もたらされました。そして、私が住んでいる町もこの大雨の影響を受けました。

その日は、凄まじい雨が家の屋根に激しく打ち付ける音でいつもより早い時間に目が覚めました。リビングに行くとすでに自分以外の家族が起きていて、心配そうに大雨関連のニュースを繰り返すテレビを見ていました。思わず窓から外に目を向けると、まるでバケツをひっくり返したかのように強い雨が地面に打ち付けていました。父から聞いた話によると、このとき既に町内を流れる谷川の水位が上がり、氾濫しかけていたようでした。その後も雨は勢いが衰えることなく午後まで降り続き、白山市から緊急安全確保が出される中、避難所に避難はせずに家の二階で待機していました。夕方になって雨が止み、外に出ると見たことがない光景が広がっていました。谷川の氾濫で道に濁流が流れて川のようになったり、川の流れをせき止めるところに樹木の枝葉や岩石が積みあがったりしていたのです。これらの影響で、町内のたぐさんの家が床下浸水の被害を受けました。幸いにも、自分の家は全く被害がありませんでしたが、今まで生きてきてこんなことを経験したのは初めてだったため、とても衝撃的でした。

そして、雨が止んで、もう被害は広がらないだろうと安心していても束の間、夜になって断水が始まり、蛇口をひねると少しだけ出たいた水はやがて完全に出なくなり、その瞬間から私たちは不自由な生活強いられるようになりました。

今回の大雨から、私は教訓となることを二つ学べました。

一つ目は、水の大切さです。断水によって風呂やトイレ、洗濯機など日常生活に必要なものが使えなくなり、とても不便でした。特に、風呂と洗濯は近くの温泉に入りに行ったり、コインランドリーを使っ

たりする必要がありました。それでも、市から支給された飲料水や、山の湧き水を利用するなどの工夫をしました。しかしながら、家にためてある水の量には限りがあり、少しずつしか使えないという難点も当然のようにありました。「蛇口をひねればすぐに水が出る。」こんなことは普段の生活において当たり前のことだけれど、それが不可能だった断水を一週間近く経験した身としては、元の生活がどれほど幸せだったのかを痛感したし、感謝しなければならぬと思いました。また、毎日必然的に節水をしていると、普段の生活でどれだけ多くの水を贅沢に使っているのかが分かり、断水が治って元の生活に戻っても節水を心がけるようになれました。

二つ目は、助け合うことの大切さです。前述したように、この大雨によって私の住んでいる町では谷川が氾濫し、周辺の地域に比べて大きな被害を受け、町内のいたるところに土砂が堆積しました。私は大雨の二日後に、母と一緒に被害を受けた先輩の家に行き土砂の運び出しを手伝いました。本音を言うと最初は、面倒くさいから行きたくないと思っていたけれど、炎天下の中で町内の多くの人が駆けつけて懸命に作業を進めているのに行かない理由がないと思い、作業を手伝いだしました。暑い中での過酷な作業で多くの人が疲弊していました。そんな中でも、その場にいた全員で励ましあい、ときには笑顔を見せてお互いを鼓舞しあったり、全員が被害を受けた家の人に親身になって接したりしている姿を見て、心を打たれるとともに、「助け合いの精神」の意味や大切さを学ぶことができました。私たち人間は社会的存在として様々な社会集団に溶け込んで生活しています。このような「地域社会」も、困ったときに助け合うというとても大事な役割をもった社会集団です。私たちは「家族」と同様に生まれたときからひとつの社会集団として「地域社会」に属しています。私はその一員としてたくさんの人たちと地域に協力しあうことが、これからの生活をより豊かにしていくために必要なことだと感じました。

私は、このように大雨から主に二つのことを学びました。ですが、学んだことにただ満足せず、それらをこれからの生活に生かせるように、努力していきたいと思えます。

